

原因・理由の動詞ナクテ文における前件・後件の述語の組み合わせ —『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を調査対象として—

大村智美

要旨

本稿では、原因・理由を表すテ形接続の複文の否定である動詞ナクテ文の前件・後件の述語が意志か非意志かということに注目し、その使用実態を調査した。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の出版サブコーパスを対象とした今回の調査では、前件・後件とも意志の組み合わせは観察されず、ともに非意志の組み合わせが約7割と最も多かった。前件が意志の文は非常に少ないこと、後件に意志が来る文が全体の約4分の1を占めることも確認された。また、後件に意志が来た場合には「やむを得ず」「当然の結果として」そうするという意味に解釈された。これらの結果は、原因・理由を表すテ形接続文についての先行研究の記述を裏付けるものであると言える。さらに、指導上の留意点として、学習者の産出した不自然な文の要因を、直ちに後件の「意志動詞」にあると判断するべきではないことを述べた。

キーワード

テ形、複文、無意志動詞、意志・非意志、待ち望み型文

1. 研究の背景と目的

従属節がテ形をとる複文は継起、付帯状況など様々な用法を持つが、その中でも原因・理由のテ形接続は、学習者が不自然な文を産出しやすいとされる（加藤 2005、吉田 1994）。

日本語記述文法研究会（2008）によると、「テ形・連用形は、従属節または主節のどちらか、あるいは両方が無意志的な動きである場合には、原因・理由を表すと解釈できる」（p. 285）。つまり、主節と従属節の述語が意志的であるか無意志的であるかが、テ形節がどのような意味・用法になるかを定める一要素である。これは、学習者が自然な原因・理由のテ形文を産出するための重要な文法知識の一つであると言えるだろう。しかし、その使用実態についての調査は管見の限りない。

そこで、本稿では、従属節が動詞のテ形の否定の一つである動詞のナクテをとる文（以下、V ナクテ文）の主節・従属節に現れる述語の意志・非意志⁽¹⁾の使用実態を調査し、先行研究の記述を検証すること、また、それを踏まえて指導上の留意点を示すことを目的とする。動詞のテ形接続文ではなく、V ナクテ文を調査対象にするのは、V ナクテ文が用法の分類に適していると考えられるためである。先行研究でも述べられている通り、動詞のテ形接続文の用法は連続的であり、截然と分けられるものではない。何に注目するかによって、継起にもとれるし、原因・理由にもとれる、といったように、分類する際に判断に迷う文が少なくなく、それが原因・理由の動詞テ形接続文研究の妨げになっているようにも思える。一方、否定の場合は、庵・高梨・中西・山田（2000）によると、付帯状況と

手段は「ないで」、原因・理由は「なくて」、並列は「ないで／なくて」で表され、「継起を表す『～て』に対応する否定の形はありません」(p. 192) ということである。本稿ではこの立場をとり調査をすることとする。

2. 先行研究

成田(1983)では、「様態動詞」を中心に、テ形が副詞的に用いられる条件について考察している。他の用法との違いを述べる中で、「原因・理由をあらわす『て』形に動作動詞はふつう使われない」とテ形接続文の前件について言及している(p. 140)。

仁田(1995)では、「時間的継起」用法の典型は、主節・従属節とも意志動詞であり、「起因的継起」⁽²⁾では無意志動詞が多く、特に従属節の「無意志動詞の多さは注目に値する」と述べている(p. 111)。また、文末について、原因・理由のテ形接続文では、「基本的に待ち望み型文」⁽³⁾末は共起しない」としている(p. 117)。

森田(1989)は、「試験が終わってほっとした」「用事ができて、あしたは行けないよ」などは、「自発的感情か、やむを得ないという状況や気持ちの表れ」であり、主節に意志的な動詞が来ても、「彼は用事があって帰った」などのように、「その意志が骨抜きにされてしま」い、意志・命令・依頼・許可・禁止・制止などの積極的な意志表現(「用事があってぼつぼつ行きましょう」など)は成立しにくいと述べている(p. 755)。

学習者用教材・教師用指導書では、主節に言及しているものが多いようだ。例えば、『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 翻訳・文法解説 英語版』(スリーエーネットワーク 1998)では、主節は非意志的な表現または状態の表現でなければならないとし、通常、感情を表す動詞や形容詞、可能性や状態を表す動詞や表現が来るとしている(p. 90)。また、学習者用のワークブック『ことがらの関係を表す表現－複文－』(小川・三枝 2004)では、「病気が悪化して、入院した」などの例を挙げ、「入院した」が「やむを得ず」という意味になることを説明しているが(p. 48)、このように主節に意志動詞が来た時の意味が説明されている学習者用教材は多くないようだ。

3. 調査概要

3.1 調査対象

使用したコーパスは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ)⁽⁴⁾である。対象は、出版サブコーパス⁽⁵⁾(新聞・雑誌・書籍)のコア・非コアとし、検索アプリ「中納言」の文字列検索モードを利用した。検索文字列を「なくて」とし、8,806件の検索結果(検索対象語数: 34,367,008)を得た。その後、目視で「～なくては／も」「～なくて。(言いさし)」などを除き、「原因・理由」と判断できる597件のVナクテ文を抽出した。そのうち、同一作品で同じ文が繰り返し使われている5件(次に挙げる例(1)の「電気をつけなくて命拾いしたな」)は1件とカウントし、593件の用例を分析対象とする。

- (1) ところが、犯人は広谷亜紀の供述を利用して、『電気をつけなくて命拾いしたな』というメッセージを残し、犯行時刻が十一時半であるという先入観を植えつけようとした一実際はその時刻に、犯人は松永の部屋にいなかったにもかかわらず。

3.2 分類方法

分析対象 593 件の用例を次のように分類した。以下、主節を「後件」、従属節を「前件」とする。

【前件】 「意志」 …… 意志動詞、使役、無意志動詞の意志化表現
「非意志」 …… 無意志動詞、可能、受身、意志動詞の無意志化表現
「いなくて」⁽⁷⁾、「～ていなくて」、「～たなくて」

【後件】 「意志」 …… 意志動詞、使役、無意志動詞の意志化表現
「非意志」 …… 無意志動詞、可能、受身、「～ている」、「～たい」、
意志動詞の無意志化表現
形容詞、名詞、謝罪/感謝表現

意志動詞であるか無意志動詞であるかは、杉本（1997）の分類を参考にした。その上で、前件・後件それぞれにおいて、それぞれの主体によってコントロール可能であるものは意志動詞、不可能であるものは無意志動詞と判断した。

また、杉本（1997）では、動詞句の前に、「思わず」「いつの間にか」のような無意志化表現を誘導する副詞や副詞句が置かれ、文末に「～てしまった」「～てしまっていた」などの形式が置かれた場合、意志動詞が「無意志化」されるとしている。これとは逆に、「わざと」などの副詞を使用したり、文末に「～て見せる」「～てやる」などを用いたりする場合、無意志動詞が「意志化」されると述べている（p. 45）。本稿ではこれに倣い、無意志化した意志動詞を「意志動詞の無意志化表現」、意志化した無意志動詞を「無意志動詞の意志化表現」とする。例えば、次に挙げる例（2）の後件「聞き返した」は意志動詞であるが、無意志化表現を誘導する副詞「思わず」があるため、主体によってコントロール不可能であったと捉え、「意志動詞の無意志化表現」として「非意志」に分類した。

(2) それを本気で言っているとは思えなくて、僕は思わず聞き返した。(PB59_00048)

さらに、例（3）のように「移動」という名詞で終わっているが、動詞「移動する」の省略であると判断したものなどは、動詞に分類した。

(3) 十二、三分釣って誰も釣れなくて次のポイントに移動。(PB49_00185)

4. 結果

調査の結果を表 1 に示す。

表 1 BCCWJ における V ナクテ文の前件・後件の述語の組み合わせ

		後件		合計
		意志	非意志	
前件	意志	0 (0%)	21 (4%)	21 (4%)
	非意志	139 (23%)	433 (73%)	572 (96%)
合計		139 (23%)	454 (77%)	593 (100%)

次に、結果の詳細を①～④に述べ、例文を示す。

①【前件】意志 × 【後件】意志

原因・理由ととれるものはなかった。

②【前件】意志 × 【後件】非意志

全体の 4% (21 件) と極めて少ない。21 件中、後件が (4) (5) のような形容詞等の状態 17 件、(6) のような受身 1 件、(7) (8) のような無意志動詞 3 件であった。

- (4) 離婚後の寂しさを、タバコでさらに悪化させることを選ばなくて本当によかったと思います。(PB34_00255)
- (5) 社長直通か、そいつはありがたいな。今も受付の女がなかなか取りつがなくて、結局秘書どまりだったんだ。(PB39_00270)
- (6) 十分な情報開示を行わなくて、当該金融機関が預金者から見放されていくというのは、それは金融機関の一つの判断、経営判断ですからまだしもですが、(略)(PB13_00045)
- (7) そのことを知らずに、『電気をつけなくて命拾いしたな』というメッセージを残すことは、ナンセンスであり、かつ不可能です。(PB29_00479)
- (8) なかなかサンタさんは来なくて、もうあきらめようかと思ったとき、サンタさん(の衣装を着た人)が運転するトラックが、家の前に停まりました。(PB27_00223)

後件が無意志動詞のもの 3 件を見ると、(7) のように前件と後件の主体が同じものが 1 件、(8) のように前件と後件の主体が異なるものが 2 件であった。前件と後件の主体が同じ (7) の後件は、「命拾いした」であり、これは「よかった」と同じような「幸いであった、運がよかった」という意味であると考えられる。表 2 に組み合わせの内訳を示す。

表 2 前件が意志、後件が非意志の場合の述語の組み合わせ

前件	後件				例
意志	非意志	形容詞・名詞等	17 件		(4) (5)
		受身	異主体	1 件	(6)
		無意志動詞	同主体	1 件	(7)
			異主体	2 件	(8)
計			21 件		

③【前件】非意志 × 【後件】意志

全体の 23% (139 件) であった。ただし、後件が「～ (よ) う」などの意志表現、「～てください」などの働きかけの表現は見られなかった。

- (9) 盲腸のときは夜中、鎮痛剤が効かなくて、一人で病院へ行きましたけどね
(PB14_00090)

この組み合わせにおいて最も多かったのが、(10) のような前件が可能表現の文で 63 件あった。また、無意志動詞で多かったのが (11) のような「わからなくて／解らなくて」で、9 件あった。

- (10) あまりにも信じられなくて 3 回も体重計に乗りなおした。 (PB34_00168)
(11) 「どうしてこういう話になったんだったかな？ きみはいったい何が心配なんだ？」自分でもよくわからなくて、クリスティは首を横に振った。
(PB39_00136)

後件の意志動詞は、前件が原因となり、やむを得ず (例 (9))、あるいは、当然の結果としてそうしたこと (例 (10)、(11)) を表している。

④【前件】非意志 × 【後件】非意志

全体の 73% (433 件) と最も多かった。その中でも、(12) のような前件が無意志動詞で後件も無意志動詞の文が 80 件と最も多く、次に (13) のような前件が可能表現で後件が無意志動詞の組み合わせが多く 69 件あった。

- (12) 移ってきた社宅のこと、子どものこと、毎日の生活、新しくもらった白い杖は突き音がよくて助かる。でもまだ慣れなくて、よく迷う。 (PB59_00737)
(13) 生きられなくて死ぬのではない、自分の人間としての立場を捨てきれなくて死ぬのだろうと思う。 (PB31_00132)

5. 考察

調査の結果から、前件に意志が来る文は非常に少ないことが分かった。これは、先行

研究の、前件には無意志動詞が多いという指摘（成田 1983、仁田 1995）を裏付けるものである。しかし、意志がまったく来ないというわけではなく、後件に「よかった」などの形容詞等が来るものも見られた。この点が、教材等に前件に意志が少ないことが記載されない理由であると考えられる。

後件に非意志が多い（今回の調査では全体の 77%）ということも、教材などの、後件には感情を表す表現が多いなどという記述と一致する。後件に意志が来た場合は、(9) のように「やむを得ず」（森田 1989、小川・三枝 2004、鈴木 1978）、あるいは (10) (11) のように、当然の結果としてそうしたという意味になるということも確認できた。そして、今回の調査では、後件が意志の文は 23%あった。これは全体の約 4 分の 1 に当たり、少ない数とは言えないであろう。

また、仁田（1995）の「二事象ともに、主体にとって制御可能な事象であれば」「主体の意図性・計画性の元でのものとして解され、起因性を帯びず、時間的先後関係が前面化することになる」（p. 257）という記述通り、前件・後件とも意志の場合は、原因・理由とは解せるものはなかった。

今回の調査では先行研究の記述と異なるものは見受けられず、量的にそれらを裏付ける結果となった。

6. 指導上の留意点

本調査で明らかにしたことを踏まえ、指導上の留意点を述べる。教師は、学習者が産出した不自然な文を文末に「意志動詞」が使用されているために誤用であると判断してしまうことがあるのではないだろうか。しかし、今回の調査結果が示すように後件に意志動詞の来る文も少なくなく、不自然さの要因を、直ちに文末の「意志動詞」にあると判断すべきではないだろう。「意志動詞」が来ないわけではなく、仁田（1995）で述べられているように「待ち望み型文」が来ないということである。さらに、滝井（1998）では、前件と後件の「必然性」の程度が高くなければ、自然な文とはならないことが述べられている。これは重要な指摘である。教師は、これらに留意し、学習者の産出した不自然な文の要因が何であるのかを十分に検討し、指導する必要があるのではないだろうか。

また、前件には可能表現が多いこと、前件が意志の場合は、後件は「よかった」等の形容詞が多いことも指導上のポイントとなろう。

7. まとめと今後の課題

本稿では、BCCWJ における原因・理由を表す V ナクテ文の前件・後件の述語の使用実態を調査した。今回の調査では、前件・後件とも意志の組み合わせはなく、ともに非意志の組み合わせが 73%と最も多く観察された。前件が意志の文は非常に少ないこと、後件に意志が来た場合には「やむを得ず」「当然の結果として」そうするという意味になることも確認された。これらは、先行研究の記述と一致するものである。また、指導上の留意点として、学習者の産出した不自然な文の要因を直ちに後件の「意志動詞」にあると判断すべきではないことを述べた。

今回の調査では V ナクテ文を調査対象としたが、テ形接続文においても同じ結果が得られるかについては更なる調査が必要であり、今後の課題としたい。特に、仁田（1995）に

において、「契機」として、継起と原因・理由の間に位置づけられている、「主たる事象が、知覚・認知によってえられた情報・現象を刺激として導き出される、といった類いのもの」(p.109)、例えば、前件に「見る」「聞く」などが現れ、それが後件の事態の「契機」になる文については、V ナクテ文には観察できないものであり、テ形接続文の調査・分析を要する。

(大村智美・おおむらともみ・フリーランス・tmiomr624@gmail.com)

注

1. 本稿では、無意志動詞と状態性述語をあわせて「非意志」と表現する。
2. 仁田(1995)では、〈起因的継起〉を、主節の動詞が「無意志動詞で形成されているものを《原因》と仮称し、意志動詞からなっているものを《理由》と仮に呼んでおく」(p.113)として分類していることから、〈起因的継起〉が本稿の「原因・理由」に当たるものと判断する。
3. 仁田(1991)では、発話・伝達のモダリティを①働きかけ(命令、誘いかけ)②表出(意志・希望、願望)③述べ立て(現象描写文、判断文)④問いかけ(判断の問いかけ、情意・意向の問いかけ)に分類し、①働きかけと②表出は「『待ち望み』といった情意的な言表事態めあてのモダリティを持っている」(p.22)とし、「命令や依頼や禁止や誘いかけの背後には、話し手の、その事態実現を望ましく思うといった言表事態に対する捉え方が存している。その事態の実現を話し手自身望ましく思うからこそ、その事態の実現・遂行を聞き手に要求し働きかけるのである」(p.26)と説明している。
4. BCCWJ は、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために国立国語研究所が構築した均衡コーパスである。1億430万語のデータを格納している。(国立国語研究所2025)
5. BCCWJ は三つのサブコーパスからなる。そのうち、出版サブコーパスは書き言葉の生産力という側面に着目したサブコーパスで、2001年から2005年の間に日本国内で出版されたすべての書籍・雑誌・新聞から無作為抽出によって得られた約3437万語分のテキストが収録されている。(山崎2014、pp.23-24)
6. 例文の後の記号はBCCWJのサンプルIDである。下線は筆者による。
7. 意志動詞の「いなくて」は、状態動詞として「非意志」に分類する。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 小川誉子美・三枝令子(2004)『ことがらの関係を表す表現－複文－』スリーエーネットワーク
- 加藤由紀子(2005)「原因・理由を表すテ形接続に関する一考察」『岐阜大学留学生センター紀要』vol.2005, 13-24.
- 国立国語研究所(2005)「国語研コーパスポータル」<
<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>>(2025年12月23日閲覧)

- 杉本和之（1997）「意志動詞と無意志動詞の研究－その 2」『愛媛大学教育学部紀要』第 29 巻第 2 号，33-47.
- 鈴木忍（国際交流基金）（1978）『教師用日本語教育ハンドブック③文法 I 助詞の諸問題 1』凡人社
- スリーエーネットワーク（編著）（1998）『みんなの日本語 初級Ⅱ 第 2 版 翻訳・文法解説 英語版』スリーエーネットワーク
- 滝井洋子（1998）「原因・理由の「て」形接続についての一考察」『日本語・日本文化』24, 81-93.
- 成田徹男（1983）「動詞の「て」形の副詞的用法」，渡辺実（編）『副用語の研究』明治書院，137-158.
- 仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」『複文の研究（上）』くろしお出版，87-126.
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会（編）（2008）『現代日本語文法 6』くろしお出版
- 前川喜久雄（監修）山崎誠（編）（2014）『書き言葉コーパス－設計と構築－』，講座日本語コーパス 2. 朝倉書店
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 吉田妙子（1994）「台湾人学習者における「て」形接続の誤用例分析－「原因・理由」の用法の誤用を焦点として－」『日本語教育』84，92-103.

使用データ

- 国立国語研究所（2025）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（バージョン 2021.03，中納言バージョン 2.7.3，分類語彙表情報 2025.03）<<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>>（2025 年 3 月 26 日閲覧）